

今月の重点活動

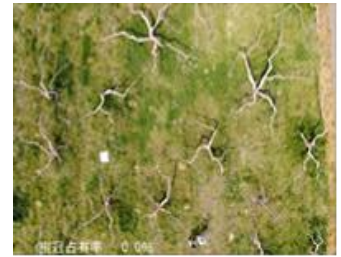
■スマート農業 **ドローンを活用し柿樹幹占有率を判定**

農業普及課とJAぎふでは、3月5日に県産業技術センター研究員の協力のもと、ドローンを使って地上約30mの柿園上空から樹園地の写真を撮影した。これは、撮影された画像を元に産業技術センターが作成した樹幹占有率を簡便に算出できる「占有率判定ソフト」を用いて生育状況の判定を行うのが目的である。

高品質な柿生産の為に、樹体への日当たりが重要で、樹幹内部まで日が当たるよう間伐・剪定を行う必要がある。このソフトを使えば、樹園地の状態を速やかに解析、見える化でき、今後の改善策などの情報提供に役立つ。

引き続きドローンを用いて、高品質な柿生産を行う園地の情報を蓄積し、各地域の振興会研修会での指導資料として活用を図る予定である。

(園芸産地支援第二係・鷺見彩子、小枝俊仁)



【撮影した写真と分析画像】

新たなブランドづくり

■にんじん **センチュウ対策として緑肥を作付け**

農業普及課では、各務原にんじんの生産安定を図るため、減収原因の一つである、土壌中のセンチュウ密度の調査を実施している。

その結果、減収被害が多かったほ場では、キタネグサレセンチュウの密度が高く、その対策が必要であることが判明した。

そのため、対策として緑肥作物であるエンバクを作付け、生育密度の低下を図ることとなった。

3月には、実証農家においてエンバク播種、5月にはすき込む計画で、農業普及課では、すき込み後にセンチュウ密度を調査し、防除効果について検証する予定である。(地域支援第二係・水川 誠)



【対策の緑肥作物播種】

売れるブランドづくり

■大豆 **管内農業法人が岐阜県豆類経営改善共励会で最優秀賞を受賞**

岐阜管内では、農業法人や大規模農家が転作水田を利用して、約100haで大豆を栽培している。

この度、管内で大規模に稲麦大豆を栽培する本巣市のアグリード株式会社を県豆類共励会に推薦することになり、農業普及課では、JAぎふとともに推薦調書の作成や現地審査での対応を行った。

令和元年産は、播種時期である7月に降雨が続いたため、8月播種と例年になく作業が遅れた。同法人では、これに対処するため狭畦密植栽培を導入213kg/10aの単収を確保する一方、スマート農業機械を活用し4.85時間/10aの労働時間を達成した。

この様な実績が評価され、県豆類共励会経営の部において最優秀賞及び県知事賞を受賞、3月30日には表彰状が授与される予定である。

同法人では、この受賞を励みに大豆作付面積を倍増させる計画であり、農業普及課では、引き続き管内生産者への指導に取り組み地場産大豆の安定生産・品質向上を図る。

(地域支援第三係・松本政行)



【受賞を喜ぶ受賞法人】

■花き **新型コロナウイルスによる影響調査を実施**

新型コロナウイルスの拡大防止措置に伴う、学校行事や各種展示会、イベントなどの延期、中止などで、本来3月が需要期である切花は販売単価・販売量が著しく減少している。

鉢花では、切花ほど単価は下落していないものの、例年よりは安く推移しており、今後の需要期である「母の日」までこの傾向が継続するかどうか懸念されている。

農業普及課では、このような各農家の現状について聞き取りを行い、農業経営課の革新支援専門員や農産園芸課と情報共有を進めている。

これからも関係機関と連携し、影響を受けた農業者が利用可能な資金等の情報の周知を進めるなど、状況に応じた支援に取り組む。

(園芸産地支援第一係・福田 富幸)



【出荷を待つ花苗】

■えだまめ **適正な温度管理を支援**

岐阜管内のえだまめは、約120haの栽培面積があり、県を代表する特産品である。春先からの出荷に向け、すでに1月のハウス栽培を皮切りにベトコン栽培、トンネル栽培と播種が順調に進んでいる。

本年は暖冬の影響で、ハウス栽培では平年よりも1週間ほど早く開花し、トンネル直播き栽培も1週間ほど早く播種した。

農業普及課では、この時期は温度変化が激しいことから、トンネル内の地温や気温を測定し、適切な温度管理により安定した収量が得られるよう支援を進めている。

(園芸産地支援第一係・高井 啓)



【トンネル内の地温・気温測定】

■いちご **イチゴ原種苗の検査と配布**

県育成品種「濃姫」、「美濃娘」、「華かがり」の増殖用苗は、原々種苗、原種苗、親苗を管理する各施設で生産され、生産者の元へ配布される。

栄養繁殖で苗生産を行うイチゴは、各施設が優良な苗を生産し農家に届ける大きな責任があり、農業普及課では重点的に支援している。

3月16日には、県園芸特産振興会や農業普及課、県関係機関の担当職員が本巣市にある原種苗生産施設にて、原種苗の配布前の検査を行い、その後、各地域の親苗生産施設へ原種苗が配布された。

栄養繁殖で苗生産を行うイチゴは、各施設が優良な苗を生産し農家に届ける大きな責任があり、農業普及課では関係機関と連携して原種苗・親苗生産施設での栽培指導を行い、今後も優良種苗の安定生産に向けた支援を継続する。

(園芸産地支援第二係・三和 浩一、園芸産地支援第一係・菊井 裕人)



【原種苗の配布作業】

住みよい農村づくり

■桑の木豆生産クラブ **緑肥で連作障害回避**

飛騨・美濃伝統野菜である「桑の木豆」は、山口市旧美山町で古くから栽培されている。

しかし、10年近く連作されているほ場もあり、連作が要因と考えられる減収が起きている。そのため、緑肥作物として利用されるライ麦を間作することで、連作回避できないか検証することとなった。

農業普及課では協力農家を対象に、2月末から3月上旬かけて播種方法について指導、現在、ライ麦は10cmくらいに生育している。

今後、ライ麦の生育状況を観察しながら、すき込み時期や桑の木豆の施肥量、来年作への検討し、今後の桑の木豆の生産安定につなげる予定である。

(地域支援第三係・宮木英有)



【ライ麦の播種作業】